

カンツォネッタ (Canzonetta) V

倉橋重史

ピクチャレスクと出藍の誉れ

ピクチャレスク (picturesque) とは「絵のような」、「絵に描いたような」、「絵のように美しい」、また「人目をひく」、「魅力的な」、「生き生きしている」という意味である。イタリア語のピットレスコ (pittresco) に由来する。それは形容詞であるが、18世紀英国では崇高でも美でもない絵画性を示す言葉として用いられ、18世紀後半から19世紀前半に英国では建築や造園上の趣味を指した。

絵画では自然の風景や人物、静物をありのままに写実的に描いた絵であるよりも、遊びや気晴らしの傾向がつよく、想像的により美化してそれらを描いた絵である。つまり風景や人物、静物と同じく、それより以上に美しく描かれた絵である。とくに「絵はがき」のような風景画が18世紀の英国ではピクチャレスクと呼ばれ愛好された。彼らはターナーやゲンズボロー、コンスタブルらが描く風景、理想的な光景をこよなく愛したのである。そのような、いわばピクチャレスクの流行の背景には、見知らぬ土地へ行った人達の話や、そこを訪れて風景を写生した画家の作品を目にした人々の好奇心や憧れがある。また都市化の進展によって失われていく大自然への憧憬などの要因が働いているものともいえよう。18世紀のみならず、今日でもそのような絵は愛される。現代は自然環境が汚染され、醜い姿をみるが多くなったので、かえってそのような絵が好まれると言ってもよいであろう。ではピクチャレスクとは一体どのようなことなのか。

それは絵でないものを絵と比較して、絵のように美しいと形容することであるが、ある対象が絵と対比されて絵のように美しいと判断することである。対

比し比較する対象が絵のそれと比べられるのである。そして美しいと評価されるのである。とすればこのことは比較の基準になる元の絵が美しく素晴らしということと言外に認めていることになる。そのように認めるから絵のように美しいと判断できるのである。比較するのに絵を例にだしている。ということは絵のように美しいといえるのは先に絵があるからである。またピクチャレスクとは絵が比喩的であり、対象が美しいから表現する言葉である。この場合絵は付け足しである。絵のように美しいというので、そのような絵を想像するのである。しかし他者にはその絵がどのように美しいかは分らない。美しいと想像するしかない。比較する対象を見ている人の判断にまかせるしかない。したがってピクチャレスクという言葉は対象を見る人に限られる。あえて言えばその人の判断がどのようなかを推測する基準として美しい絵を想定することが出来るわけである。それは「私の言っていることは嘘である」とある人が言ったという嘘つきのパラドックスに等しいのかもしれない。

それはさておき、ピクチャレスクを風景画の例にとると、その絵はある風景を人工的自然として描いた絵である。しかしそれは絵画であって自然の風景そのものではない。ピクチャレスクとよばれるような絵は素晴らしい自然の手本がなければ描けない。自然の風景が前提にある。自然そのものが素晴らしいので、美しい風景の絵が描けるのである。卵が先か鶏が先かというならば、卵という自然が先である。だが18世紀の人々のみならず、多くの鑑賞者は絵が素晴らしいから愛し、誉めるのである。自然も素晴らしいが、それを描いた絵の方がより素晴らしいのである。ここでは鶏の方が先である。素晴らしい自然の風景を画家がより素晴らしく描くことに感心する。そして画家の自然を見る眼、それを描く力量、技量に感動するのである。

われわれはまだ見ない自然を描いた風景画を鑑賞し、大自然の素晴らしさを間接的に感受する。そして可能ならばその風景をこの目でみて、あの絵で見たような景色であるということを再確認したいのである。そこに未知の場所への旅のブームが起こり、自然景観が名所に変わり、そこへの旅行が流行る。広重の東海道の絵が当時の旅のブームをひこおこしたのと同じ理屈である。

他方、人はかつて行ったその自然の風景を見て、その偉大さに驚き、素晴ら

しさを満喫しながら、またそれを描いた絵画を鑑賞する。それは反芻現象である。絵を見て改めてかつて行った光景の素晴らしさに感激するのである。それは旅で撮った写真を見ながら旅先の自然や風景の美しさ、素晴らしさを再確認するのと同である。旅行ブームと写真屋の関係は相互関係にある。われわれの感性はこのように相互作用して自然と人工物である絵画の二つに注がれるのである。大自然と、絵画という小自然の両方からわれわれはその美を享受しようとして、絵画を室内に飾り、それを鑑賞するのである。そこにわれわれが自然と絵画から素晴らしさを受けとる楽しみがあるといえよう。

さて、「青は藍よりでて藍より青し」と言う言葉がある。いわゆる「出藍の誉れ」である。弟子が先生より優れていることの意である。ピクチャレスクはこれに似ている。弟子は教師を追い越す心算で研究をする。たんに心算でなく実際に追い越すべきである。教師も追い越されないように一所懸命に研究しなければならない。両者が切磋琢磨してはじめて学問は前進する。ただ両者の差は歴然としている。年配の方が先に参るのは必定である。マッカーサーが兵士としての任務を辞すとき「老兵は消えるのみ (fail away)」と言ったが、それは程を弁えた人しか言えない言葉である。孔子のいう「矩 (のり) を越えず」に似ている。今日、「出藍の誉れ」という言葉を用いることも、それを聞くことも少なくなったのは、教師の方に負けん気が強かったり、弟子に謙譲の気持ちがあつてのことであろう。だが実際には口にしないが、現実には両者に甲乙の差がつくことは当然である。つまり弟子の方の色が青くなることが多いのである。研究は競争であり、非情の世界である。弟子は教師の屍をのりこえていくべきである。そこには何らの躊躇もいらぬ。

世の中でどちらがより美しいか、自然か、ピクチャレスクかを比べるのも面白いし、学問の世界で「青さ」を比較するのも楽しい。ただこの場合、教師が良くできておれば、弟子も出来がよいとは一概に言えない。まさに反面教師であり、弟子はその反動で猛勉強をする場合もあるからである。

マートンは『社会理論と社会構造』の序論にホワイトヘッドの「その創立者のことを忘れかねている科学はもう駄目であろう」という言葉を引用している。ホワイトヘッドは「老いたるものとは何一つ誤りを犯すまいとする人間のことで。論理は老いたるものへではなく若き者へ送られるオリーブの枝であり、

若き者の手にする科学を創造するための魔法の杖なのです」(『思想の組織化』171頁)と言っている。老いた研究者は科学の最前線からも前線からも退却すべきである。彼は後方にいて若者の活動を見守るべきである。それが科学の発展にとって必要であろう。だが科学は白紙状態から出発することはできない。先人のきずいた業績の上に、その延長線上に展開するということも言われる。科学は老人研究者を超えて発展するという立場は、科学社会学でいうクーンの立場であり、後者の延長線上の主張はマートンの立場であるといえよう。科学社会学を離れていえば、ピクチャレスクは自然の景色と同じく美しいが、絵に描いた絵の美もまた美しいとみる立場であり、後者の立場を言い、「出藍の誉れ」は教師が弟子の出来のよさをほめる言葉であり、教師を乗り越えるという意味でクーン的であるといえよう。またギディンズはモダニティの本質を把握するためには既存の視座との訣別(break away)が必要であると述べているが、これもクーン的である。

いずれにせよ自然そのものも美しいが、それを描いた絵もより美しいと見ることができるのは楽しいことである。美しいものはいずれも美しいからである。学問の優秀さの評価もまたこれに似ている。すばらしい先達の輝かしい偉業は後輩の実績とともに評価されるべきである。ただこの場合、評価は必ずしも先人の業績の全面的な賛同や礼賛とは結びつかない。むしろ過去の業績を乗り越え、批判するところにこそ学問の世界の前進があり飛躍があるからである。その点でピクチャレスクの方は人間的でなく自然的で優美であるといえるであろう。

回春

人は誰しも長寿を願う。それは長生きの希望となり、はたまた不老不死の夢となる。古人の多くはその願いを歌に託し、文にしたため、あるいは現実的に不老不死の薬を求める行動にでた。不死の薬は飲めば、死からまぬがれると信じられ、思われた薬である。それは仙人になる薬でもあった。その願いは洋の東西を問わず、時代を超えて存在する。

回春、再生の願いもそれと同様に多い。化粧品が次から次ぎへと改良され宣

伝される。美容のコマーシャルも多い。男性は健康回復や回春の薬を求める。バイアグラという名の薬も販売許可になった。この薬について知ったのはタイム誌上であった。ウイスキー (Whisky) も永遠の命を求めて作られた。ウイスキーの原語は古代ケルト人がウシュクベーハー (uisge-beatha) と呼んだもので、それは「命の水」という意味である。中世の錬金術師が蒸留酒をラテン語でアクアヴィッテ (aqua-vitae 生命の水) と呼んだのもウイスキーに永遠の命を託そうとしたからである。ちなみにフランス語ではブランディーをオードヴィ (eau de vie) と呼んでおり、ウイスキーは whisky である。

錬金術はこのような不老長寿の薬を求める疑似科学であった。最近では医学・医術・薬学の発達によってこのような願いは多少叶えられるようになった。数年前ならとっくにあの世行きであった病人が助かるようになり、美容に効く薬や回春のそれが出回っている。病苦で悩やみ、難病で苦しむ人々にとって大いなる福音である。

歳をとるという現象、加老現象は自然のなりゆきであり、その流れに棹をさして抵抗することは無駄である。それを止めることは自然に逆らうことであり不自然である。そのことを承知の上で、人はそれを願う。しかし現実には、それなりに健康で歳をとること、人の迷惑をかけないで長生きすること、そして美しく老化することが万人の願いである。

このような不老長寿の願いを絵にしたものを、一昨年の夏、ベルリンの絵画美術館で鑑賞した。それは再生の図と言ってもよい。ルーカス・クラナッハ(父)の「若返りの泉」(Der Jungbrunnen 1546年)であった。画面中央に広い池がある。四角形のプールである。450年前の絵の中に、今どこの学校でもみられるようなプールの原型を発見した。それより驚いたのは、左側に手押し車やタンカーで運ばれる人、また馬車に運ばれてくる人々がいることである。老人達である。その老人が左岸からプールに入って、右岸に達すると摩訶不思議にも若返っているのである。皺だらけの老人の肌から皺がなくなり、体がしまり美しくなっている。

池の左右の中央、後方に高い塔があり、その上に立像が見える。そして塔の上部から噴水が落ちている。ひょっとするとこの噴水に若返りの秘薬があるであろう。噴水とか泉とかはニンフを想像させるからそのように思うである。

このようなプールがあれば現代人はそれを目掛けて殺到するであろう。プールを涉ると若返ってくる。プール中央から青春をとり戻した人々は喜んでプールの端に上がっている。向こうの端で寝そべっている人がいる。裸体を恥ずかしそうに隠す人もいる。若返りは羞恥心を回生させたのである。彼らは更衣室のテントに入り衣裳を身につけ颯爽と出てくる。

テントの裏側に描かれた空間は緑の庭で、そこに白いテーブル・クロスで覆った机があり、数人の人々が座って食事をとっている。若返るということは食欲を旺盛にする。草上では夫婦であろうか手を取りあって喜んでいる人もあり、抱き合っているカップルの姿も見える。クラナハはこのような万人がもつ回春の夢を具体的な像として描きだしたのである。

この絵では左から右への方向性が重要な意味をもっている。逆方向は考えられない。だが常識では時間は左から右に経過する。数学や物理学で時間 t は左から右へ移動する。だがこの絵では逆になっている。左に居たのが老人で右側が青年である。このように常識的な時間の流れとは逆の時間の流れというものをも想定したところにこの絵の面白さがある。発想の逆転である。そしてこのような逆想に遊ぶ余裕がある人は若いのである。

一方この絵では右の意味が重視され、左のそれは軽視されている。そこに右の優位性が見られる。左右の価値の偏在が常識的であるというならば、左に老を右に若をおくことは理にかなっている。この絵を見ながら時間的に老化して行くことが空間的には左に行くことであり、そこにとどまることであることを理解したが、老化のプロセスは右から左への方向である。他方それは右手の優越性という価値が減少することである。この絵はこのように左右の位置と老若という生の経過が重なりあっていることを教えてくれているのかもしれない。

しかしこの絵のような不死の園も再生の大地も現実には無い。ユートピアであり夢である。だから人はそれを希求するのである。求め得ないものを求めたいのが人間の性（さが）である。それを一時の悦楽として見過ごすか、あるいはそれは夢のまた夢であると達観するかが生き方を決める。歳をとると夢が現（うつ）かが分からなくなるのかもしれない。やれ健忘症だアルツハイマーだと騒いでみてもやがて死は訪れる。画家は回春が非現実的な夢であることを知りながら、それ故にこそその夢を絵に描いたのであろう。またわれわれは幻

想であることを知りながらこの絵を見るのであり、見て楽しく微笑ましいから見るのである。あるいは画家クラナハは現実を直視せよという警告としてこの絵を描いたのであろうか。ともあれ空想や希望、夢を持つことは容易であるが、それを絵として描くことは難しい。画家はそれを成し遂げている。

回想

先日ある会で「回想」を社会的にどのように考えるのかという質問をうけた。社会学では階層論はあっても回想についての研究はないが、と前置きして回想について日頃考えていたことを述べた。回想 (Erinnerung) は想起とも訳され、思い出すことを意味し、思い出そのものとも言われる。想起はプラトンの『メノン』において説明されている。彼は想起、アナムネシス (anamnesis) という言葉を用いて知とは思い出すことであると説明した。一般的に回想とは過去における経験を思い出すことを意味するが、回想は自己の内にある経験の回想であるとともに、集団的、共同体的な経験の回想もある。社会的にはその回想の共有という現象が重要な意味をもっている。家族は回想を共有する人々によって構成されているといえることができる。兄弟姉妹は親についてのさまざまなことを記憶しそれを回想する。父母についてのちょっとした思い出が兄弟姉妹に共通して存在する。亡くなった父があの時このようなことを言った、母がかつて言った言葉や優しくしてくれた仕草などを相互に話すことができるのは、兄弟姉妹として回想の共有があるからである。あるいは友人間のなつかし思い出の共有をはじめ、同郷人が故郷について同じような経験を持ち、郷愁を抱くのも、故郷についてなにがしかの回想の共有があるからであるといえよう。外国に住んで同様の望郷の念をもつのも、そこに回想の共有が存在すると考えることができる。このように回想の共有はゲマインシャフト的な集団にとって重要な一つのメルクマールであるといえよう。

ベルグソンは記憶に二種類があると言った。一つは身体で覚えた記憶であり、二つは精神の記憶である。前者は繰り返して覚え込んだ記憶で、後者は過去を表象として想起する記憶である。そしてわれわれは記憶を通じて過去を思い出そうとするとき、過去のある時点に自分を置き直しているといえる。そ

れは手探りの作業である。そして雲のように凝集し輪郭がぼんやりと姿をあらわす。だが記憶は想起されても現在とは明確に対照をなしている（『物質と記憶』第3章）。

われわれの回想はこのような記憶が混合して働くところに生じるといえるが、回想には過去の幸福で楽しい経験を思い出す場合と、そうでない場合がある。そして回想は思い出す本人が現在幸せであるかどうかによっても異なってくる。つまり回想には現在幸せな人が過去の幸せな経験を思い出す場合と、苦しかった不幸な経験を思い出す場合があり、現在不幸な人が過去の幸せな経験を思い出す場合と、苦しかった過去のそれを思い出す場合がある。ヴェーバの幸福と苦難の神義論の分類もこれに当てはめて考えることができるであろう。

このように回想は回想する人の現在の幸福か否かの違いによって異なるが、過去の経験が幸福か否かの違いは過去の時代的・社会的な状況によって異なる。年配の人々が共通に経験した戦時中、戦後の混乱期は過去の経験が幸福ではなかったという点で共通している。しかしこの経験も個人の特別の状況や、時間の推移によって異なってくる。ある人にとってその経験はかならずしも不幸であったのではなく、かえって幸福な時期であるとされる。あるいは美化され、増幅されて良い思い出となる。それは現在の幸、不幸の状態と密接に関係すると共に、本人の楽天的、あるいは悲観的なパーソナリティの相違、過去にこだわる人と、未来志向的な人によっても異なってくる。

このように回想にこだわる人と、そうでない人がいる。前者は過去の経験を大切にし、過去の回想に耽ることを楽しむ人々であり、過去志向的な人々である。それに対して後者は過去よりも現在を、そして未来に夢をもつ人々であり、未来志向的な人々である。一般的に人間は歳をとるとともに前者の過去志向的な人間となる傾向が強いようである。過去の栄光を担った老人は自分の過去にこだわることによって現在を生き、明日を生きようとする。老人会や老人ホームでの会話は過去にこだわるものが多いのではなかろうか。

しかし回想するに値する過去を持つ人は幸せである。回想をためらい、それを拒否する過去を持つ人は不幸である。自分の、そして自分をとりまく小さい範囲の社会、さらに広い全体社会についての、幸せで豊かな過去を回想することができる老人になりたいものである。そのためには現在の生き方を考えなけ

ればならないであろう。健康な心身、悔いのない現在があって初めてよい回想が可能であるかと思うからである。

アイディア

日本語ではアイディアという言葉は思いつき、着想といった意味で用いられている。われわれは「良いアイディアが浮かんだ」とか「何かアイディアはないか」などと言う。周知のようにこのアイディアという言葉はギリシャ語のアイデア、エイドス (idea, eidos) に由来する。プラトンはアイデアを時空を超えた永遠の実在と考えた。哲学ではイデー (Idee) は理念、観念などと訳されて用いられている。また社会学ではM. ヴェーバーのイデアルティプス (Ideal-typus 理念型) が有名である。

ところがわれわれの日常用いるアイディアという言葉は思いつきといった意味である。工夫、着想といった内容である。この意味のアイディアは生活にとって案外重要である。それは生活を活性化させる。普段、ふとした思いつきがその生活に彩りを添える場合がある。食事の支度のとき、冷蔵庫にこの食材があったとふと気づき、料理が豊かになったり、仕事の後であれをしておけばよかったと思ったり、旅の途中、主目的より別に立ち寄る所を思いついて旅を充実させることなどである。

また論文を書いたり、このようなエッセーや雑文に筆を走らせるときに、何かの思いつきがその内容を大きく変えたり、叙述に微妙に影響する時がある。物書きをしているとき最初はちゃんとしたプランがあり、それにそって論旨を展開していくが、途中文献にあたったり、資料を再確認したりすると、はじめのプランよりも内容が拡大したり、縮小する場合がある。またちょっとした思いつきが文章を体系的、論理的にしたり、あるいは自由自在な展開を許したりすることがあり、さらに表現を堅くしたり柔らかくしたりすることになる。

エッセーなどを書いているとこの思いつきが微妙にその内容に影響する。本来エッセーとは真剣勝負の文章という意味であるが、今日一般的に用いられている、いわゆる随筆としてのエッセーはこの思いつきがそれを面白くさせたり、させなかったりする。それは丁度薬味が料理を引立てる役割をもっているのと

同じである。だから思いつきは必要であり、重要でもある。だがそれが多過ぎると折角の料理を台無しにする。それと同じように文章の上での思いつきも程々であったほうがよい。

人の話を聞いていて、思いつきでしゃべっている人がいる。始めから話の筋道をつけていない。講義でこれを聞かされるとたまったものではない。何を語ろうとしているのか、何を教え、訴えようとしているのか皆目わからない。論理などは問題でない。支離滅裂である。思いつきという偶然が支配するのであるから、言葉のランダムな羅列では聞く方も大変である。最初話を聞くと、このように思いつきばかりが羅列されるのではないかといぶかる場合が多い。

対談などで、相手の話に応じる場合、思いつきが話の筋をつなぎ、うまく効果をはたすことがある。相手があって喋る場合は話の文脈にそった思いつきは大切であるが、話の筋から離れた突飛な思いつきは対話の妙味を失わせる。思いつきは白紙状態から生まれる場合もあるが、対話の時は相互の暗黙の了解があってはじめて生きてくるといえよう。

では思いつきはどのように起こるのか。今述べたように相手が存在する場合はその会話の状況に応じて変化する。まさに社会学のいうコンティンジェンシーの状態である。だが一人の場合、思いつくためのメカニズムは複雑であろうし、それを説明することはできないであろう。説明可能であっても、それは無用なことである。人は自然に、何かの拍子にふと思いつくのである。それは神様からの贈り物のようである。普段考えていたことを思いつくこともあり、全然思ってもみなかったことに気づく時もある。また何かの拍子で新しい考えが湧き出る時もあり、なんの弾みもなく面白いことを思いつくこともある。無意識からの思いつきと、意識的なそれとがあるであろう。無意識の場合の思いつきは生活に潤いを与え、余白を活かすので面白いし、妙である。

人と話すことにより、人と学ぶことにより新しい思いつきが生じる。そこに社会性が思いつきの刺激剤になっていることは事実であるようである。それがどのように生じるのかが分からないが、自分とは違ったさまざまな人々と話し合うからアイディアも生まれるのであろう。社交性からアイディアが生み出されるメカニズムを解明する社会学の研究は面白い。アイディアがあれば社会学はより面白くなるであろう。

論文

論文の書き方はどうなのかと問う学生がいる。ゼミの学生で毎年、卒論を書く時期になるとこの質問をする人が多い。それに答える前にその学生に何を研究したいのかをこちらから問う。学生の問題意識が重要だからである。そのテーマがかって同じようなテーマで書いた学生と似ている場合は、先輩の卒論のコピーを見せることにしている。

同じようなテーマでない場合は、それに即した対応はしている。だが過去でも現在でも学生には論文の書き方に王道はないと告げている。自分で問題を見付け、それを自分で社会的に、そして論理的、体系的に説明すればよいのである。自己満足ではいけない。自分の考え方、見方を他者に理解してもらうことが必要である。どうしてもこれを理解してほしいという意欲がなければよい論文は書けない。

ところで最大の難関は社会的に説明するということである。社会学に説明するとはどのような説明なのか。それをどのように社会的に説明することができるのか。そのためには社会学の論文や本を読むことが必要である。そこには社会的に説明したモデルがある。あるいは社会学という軌道、社会学という窓がある。それらを手本にして社会的な説明を考えるとよい。だがそれはあくまでもモデルであり、軌道、窓にすぎない。要はそれらを手本にして自分の社会学を開陳しなければならない。

最近の学術論文を読み、学会の報告を聞くと、その開陳がよく解るものもあるが、何を言いたいのか分からないものもある。後者が多くなったようにも思える。そのことは基本的に社会学がわかっていないからである。社会的な思考とは何かがわからないままに説明したと思い違いしているからである。また勝手に言葉を解釈し、歪曲し、造語している人がある。翻訳もかえってわかりにくい。原文をみれば一目瞭然であるのに、どうして理解不能な訳語になるのであろうか。わたしは大学院で訳文だけでなく原文を読むように注意しているのは下手な訳語に惑わされないためである。

文章も乱れているようである。主語が何であり、述語がなんであるかがはっ

きりしない文章に出くわすと、この文章を外国語に訳せと言いたくなる。外国語で説明できないものであれば、それは自国語でも意味不明な文章であるといえよう。また論理的でない表現や我田引水の叙述にでくわすことがある。先の文章と後の文章が続かない。飛躍がある。自分では飛躍していないと思っているのであろうが、読み続けることが不可能になる場合がある。こんな文章に出くわすと初めから読むのではなかったと時間の浪費が惜しまれる。論述が体系的でないものもある。今先に述べたことと今述べていることが同じ水準で、同じレベルで論じられるのか否かが分かっていない。縦軸の説明がいつの間にか横軸の説明になっている。両者が絡み合っていない。例えばあるところで形について述べていて、それに続くところで色彩のことについて語っている。自分では同じレベルで述べていると思っているようであるが、読む立場からすれば筋が読み取れない。このようなことが重なると苛立ちさえ覚えてくる。

論文を書くのは普段の手紙や日記を書くのとは異なる。あくまでも論理的、体系的に術語をつかって書くことが必要である。また引用文献を明示し、参考文献が適当であるか否かを考えて書いてほしい。しかしだからといって袷を付けたような表現ではこまる。自分の頭で考え、それを素直に文章にまとめてほしい。自分が考え、書く論文なのだから自分の考えを十二分に表現するようにしてほしい。形式張った他人行儀の文章は真っ平である。自己流であって、論理的、説得的な文章が好ましい。論文は自分が非常に関心をもっていることを書く作業である。書き形は自己流でよい。ただしそれを読む人のことを考えて書くことである。形式的に学術語を並べたり、熟語で飾るような文書は興味が半減する。以上のことを学生に話した。そして毎年このように質問に来る学生が多いので、論文作成のガイド的な解説を書いたコピーを手渡した。学生が納得したかどうかは解らない。その成果は論文を作成したときに判明する。楽しみである。

私のゼミでは毎卒業論文作成の期限を早めている。12月の20日辺りが提出期限であると思うが、私のゼミは卒論提出期限を11月末としている。より現実的には夏休み前に一応の草稿を提出し、11月半ばまでそれを訂正し、さらに微調整を加えて提出ということになる。その後、論文のレジュメを書いてもらう。論文を長くのばすことはある意味で容易である。だがその論文を短くまとめる

ことは案外難しい。長い論文では何が中心であるのか、焦点は何か分からない時がある。それは化粧に化粧を重ねた厚化粧のようなものである。素顔が何であったかわからない化粧である。これに対してレジュメは端的に言いたいことを表現しなければならない。しかもその表現は分かりやすくしなければならない。このような簡潔に表現する訓練として私はこの作業をゼミ生に課しているのである。毎年そのレジュメを『友』と題する小冊子の文集にまとめることにしている。前任校のゼミからの習慣で、かれこれ35年ほど続いた。前任校では『Kameraden (カメラーデン)』というドイツ語の表題であった。友、朋友、同級生という意で、それを付けるさい、カメラは箱であり、同じクラスで学んだ友達という意味があるからと説明したことがなつかしい。それを時たま開いて読むと、あの年度のあの学生が論文作成に関してこんなことを質問してきたということを思い出すことができる。最近年賀状が来なくなったがどうしているのかと心配になったりする。ただ残念なのは昨年卒業した学生の『友』は出版できなかった。わたしがこの大学に赴任して初めて半期の研修期間をとったためである。また学生にも文集のことを話したが、それを積極的に推し進める気持ちが見えなかったからである。

(くらはし しげふみ 佛教大学社会学部社会学科教授)